

側歯頸部までの距離は大きくなった。また、4つの髄角は各々の咬頭頂に対し、近遠心的に1mm弱、頬舌的に約1mm内方に位置していた。

質 問：亀 田 務 (理工)

曲線間の距離(すなわち歯質の厚さ)は測定点での接線に直角線を引いて求めれば誤差が少くなると思うが。

回 答：野 坂 久美子 (小児歯)

今回行った歯質の厚さとは、あくまでも、臨床的应用を考えての測定方法ですので、歯軸に平行ならびに直交する距離で行っております。

演題10. 歯肉移植の臨床病理学的研究

—ヒトと動物における辺縁部移植の比較—

○熊谷敦史, 鎌田英史, 佐伯厚夫, 中林良行  
菅原教修, 上野和之

岩手医科大学歯学部保存学第二講座

歯周疾患患者に、骨面上の移植と骨膜上の遊離歯肉移植を試みた際の治癒経過について観察し、骨面上移植の場合、審美性に優れていること、歯肉と骨組織の付着が強固であることなどの利点がある一方、治癒が遅れること、受与床の骨質が薄いと骨喪失が生じるなどの欠点を有することが示唆された。また、治癒経過から、両者の修復過程は基本的に異なることが推測された。

今回、これらの点を明らかにするために、実験動物における辺縁部歯肉移植の修復過程について検索を試みた。

実験動物としては、満3歳になる雄ビーグル犬7頭を用い、下顎第4小白歯部辺縁部の左側を骨面上、右側を骨膜上移植受与床とし、また下顎第2小白歯部辺縁部は骨膜上移植受与床、下顎第3小白歯部は骨面上移植受与床とし、通法に従って歯肉移植を行ない、術後、1週から2カ月までの期間で観察を試みた。また、下顎第4小白歯部移植部は、実験動物を生かさせたまま周辺の歯肉・歯槽骨を含めて同部位を抜去し、主に移植上皮と近接歯肉上皮境界部の変化について組織学的観察を試みた。

骨面上の移植は、治癒に要する時間は骨膜上の移植に比較して遅れたが、ヒトに見られたような上皮の変化や周囲組織との融和に伴う審美性の獲得は、実験動物では明らかではなかった。また、治癒後、骨膜上の移植に比較して、歯肉は薄いことが多く、骨吸収を示すことがあった。

質 問：立 花 民 子 (口解2)

御発表の骨子は十分理解出来たが、dento-gingival junctionの再生の様子が示されなかった。どの様な組織

像がみられたか、観ていたら教えていただきたい。

回 答：熊 谷 敦 史 (保存2)

今回は、主に移植上皮と近接歯肉上皮境界部の変化について検索を行っており、上皮付着構成部の修復過程については現在検索中であり、追って報告したいと考えている。

演題11. 超音波振動を応用した根管内破折ファイルの除去について (第2報)

○加園真樹, 鈴木 尚, 石橋真澄

岩手医科大学歯学部保存学第一講座

我々は、第10回岩手歯学会において超音波振動を応用しストレートな根管における破折片の除去を試み、手用切削器具のみによる除去法と比較した。その結果除去率は手用のみでは30%、超音波振動のみでは60%、両者併用の場合では90%という成績であった。

そこで今回第2報として彎曲根管を用い、超音波振動を応用して従来より困難とされている彎曲部以下に折込んだ破折片の除去を試み次の結論を得た。

結論：各グループの除去率は、超音波振動のみによる除去法グループAでは45%、手用器具のみによる除去法グループBでは0%、手用器具のみで除去できなかったグループBの試料に対し超音波を応用した除去法グループCでは55%で、超音波振動を応用したものが手用器具よりすぐれていた。

除去できた試料の除去に要した平均時間は超音波振動のみによる除去法グループA11.0分、手用器具のみによる除去法グループB算定不能、手用器具のみで除去できなかったグループBの試料に対し超音波振動を応用したグループC7.4分であった。

以上より、根管内破折片の除去に際し超音波振動による除去を試みる前にあらかじめ手用器具により導入路を作ることは有効であると考えられる。

質 問：甘 利 英 一 (小児歯)

超音波の周波数は~Hzで、出方はどの程度であったか。振動子が曲って来ること超音波の波形が変わって来るが、その状態などがどのようになるか。

回 答：加 園 真 樹 (保存1)

○振動に関しては

超音波を発振させた状態で本装置チップ先端を物体に押しあてるとおよそ32KHzの振動が物体の表面に作用する。

○使用に際しての power は

使用に際し本装置は1~10までの power の規定があるが、このうち歯内療法用には power 1, 歯石除去用に